

巻頭
言

中国共産党の歴史は粛清の嵐

| 会長 山崎 學



1911年の辛亥革命で樹立された中華民国は軍閥に乗っ取られて腐敗し、孫文は国民党を結成し軍閥打破を目指していた。そうした中で1921年7月23日、ソ連共産党のコミンテルンの100%資金援助と、ソ連から派遣されたニコルスキーとマーリンという二人のロシア人の指導で、共産主義に傾倒していて北京大学教授を務めた陳独秀を中心に、13人のメンバーが浙江省に集結して船上で中国共産党を結党した。この会には毛沢東も湖南省長として参加していた。しかし陳独秀はソ連の指示で中国国民党との国共合作に失敗した責任を取らされて総書記を辞任させられた挙句、国民党に二人の息子を殺され、1929年共産党内部の主導権争いに敗れて党から除名され、後の文化大革命では「人民の敵」として紅衛兵に墓を暴かれた。婦人科医師であった娘の陳美子は、1970年迫害を逃れるために広東省から10時間かけて香港に泳いで渡り、米国に亡命した。

実際には陳独秀が上海で1920年11月7日（ロシア革命記念日）に「中国共産党宣言」なる文書を発表したのを中国共産党の成立とすべきだが、この会に毛沢東が出席していなかったことから史実を曲げて1921年7月23日を第1回党大会としている。中国共産党はコミンテルンの指示通りに中国各地で扇動とテロによる暴力革命を目指したが、中国国内における支持拡大にはつながらなかった。

1924年コミンテルンは中国政策を大きく転換し、国民党の孫文に対して財政支援と武器供与をちらつかせて、共産党幹部を国民党幹部として革命に参加させるように迫り、資金不足に陥っていた孫文は愚かにもこれを受け入れて共産党による国民党乗っ取りが始まる（第一次国共合作）。1924年5月孫文は国民革命軍の軍官養成校を作り、校長として蒋介石を任命するが、ここにコミンテルンの推薦によりソ連でテロ活動とスパイ活動の訓練を受けて帰国した周恩来が政治部主任として着任する。周恩来はこの軍官学校で政治部主任の肩書を利用して中国共産党幹部を養成する。第四期生に林彪がいる。

1926年孫文の遺志を継いだ蒋介石は軍閥打倒の北伐を開始するが、成果を横取りしようとする共産党に邪魔され、不信を抱いた蒋介石は国民党と国民革命軍から共産党の排除を開始する。追い詰められた共産党は周恩来、国民革命軍第11師団を中心に、江西省南昌で蜂起する（南昌蜂起）が国民党に打破される。敗れた周恩来は上海租界に潜伏し優秀な工作員を国民党に潜入させる活動を開始し、党機密を握っていた国民党特殊機関に潜入することに成功する。しかし国民党幹部に昇進していた共産党幹部が逮捕されて、潜入工作が明るみに出て、蒋介石は周恩来の身

柄拘束に向かうが、他の潜入工作員からの通報で周恩来は間一髪で逃げ延びる。逃げ延びた周恩来、毛沢東は陝西省延安の劉志丹の地盤を接収して劉志丹を殺す。この劉志丹の部下の習仲勳（習近平の父）は毛沢東のもとで副総理まで出世するが、些細な事件で毛沢東の逆鱗に触れて失脚する。周恩来の秘密工作員潜入作戦はその後も続き、「遼瀋戦役」「平津戦役」「淮海戦役」の三大戦役で、浸透工作により軍事機密情報が中国共産党に筒抜けになり、戦いに敗れた国民党は中国大陸から撤退することになる。

台湾脱出後も国民党内部への浸透工作は続き、今日まで逮捕者を出している。中国共産党二代目最高指導者でロシア語の翻訳者の瞿秋白、三代目で労働者運動のリーダーだった向忠発は国民党に捕まり銃殺されたが、共産党内では「裏切者」扱いで批判された。第四代目王明、第五代目博古、六代目張聞天の3人はモスクワ留学組であったが、農民運動を指導した毛沢東との主導権争いに敗れて、王明はソ連に亡命し、博古は飛行機で墜落死し、張聞天は晩年に「反党集団のリーダー」として迫害され下放された江蘇省で死去している。

1949年10月1日中国共産党は内戦に勝利して中華人民共和国を建国し、1949年12月ウイグル、チベットを軍事占領する。1950年から始まった土地改革運動では地主を中心とした200万人が粛清され、1951年からは反革命分子鎮圧運動で71万人が銃殺されている。さらに1955年から始まった粛清反革命分子運動では130万人が逮捕され、8万人が処刑されている。さらに1959年から1961年までの間に大躍進政策の失敗で2,000万人～4,000万人の餓死者を出している。「大躍進政策」の失敗による混乱は劉少奇、江沢民の活躍で切り抜ける。こうした中で劉少奇への支持が高まるが、毛沢東は紅衛兵を組織して「文化大革命」を起し、劉少奇は逮捕され獄死し、鄧小平は農村に下放され軟禁される。こうして最高指導者として毛沢東が就任し、1943年から1976年まで党主席も23年務めた。この粛清の功績で党副主席まで上り詰めていた林彪はやがて毛沢東の粛清の手が自分に降りかかる危険を察知し毛沢東暗殺を企てるが失敗して、かつての留学先だったソ連に飛行機で亡命を企てるが、モンゴル人民共和国国内に墜落して横死する。

1976年1月三十数年間毛沢東のもとで黒子に徹していた周恩来がガンで死去し、同年9月毛沢東も難病で死去する。毛沢東の死去により毛沢東から指名を受けた華国鋒が八代目党主席に就任し、江青女史等「四人組」を逮捕し粛清する。こうした中で解放軍内の支持を得ていた鄧小平が権力を握り、子飼いの胡耀邦を共産党総書記、趙紫陽を首相に任命する。しかし、趙紫陽の改革的急進政策は党長老の反発を受けて「政治路線を誤った」として批判され、完全失脚にはならなかったが、民主化運動が弾圧された1989年の天安門事件の際に武力弾圧に反対したため罷免され、死ぬまで自宅に軟禁された。

次に江沢民が就任するが1997年鄧小平が死去するまで鄧小平による院政が続く。2002年江沢民が引退すると、鄧小平から次期総書記の指名を受けていた胡錦濤が就任するが、在任10年間江沢民の政治的妨害を受ける。2012年胡錦濤が引退すると、江沢民は習近平を後継者に担ぎ上げる。習近平政権は鄧小平派に対する江沢民派の巻き返しだったことになる。しかし、習近平は

最高指導者に就任すると恩人の江沢民派の重鎮を「腐敗摘発」の名のもとに摘発粛清を始める。胡錦濤も習近平政権により側近を「汚職官僚」として摘発され権力をそぎ落とされている。

副首相の息子として生まれた習近平は、文化大革命で両親が荒縄に縛られて北京市内を引きずり回されるのを見て生命の危機を感じて、下放政策に乗じて革命の聖地である延川県梁家河村の洞窟住居に隠れ潜んだ。その青年期のトラウマが権力を失うことへの怖さにつながり、一帯一路・民族復興といった壮大な与太話で国民をだまし続けている。

2021年7月1日創建100周年を迎えた中国共産党に小沢一郎衆議院議員、河野洋平元衆議院議長が祝電を送ったと新華社電は報じている。ウイグル・チベット自治区で国際的に「ジェノサイド」と非難されている蛮行を行っているのにもかかわらずである。さらに6月16日の通常国会最終日に欧米が行った「対中非難決議」に日本も参加するかどうかという議案が、二階俊博自民党幹事長（当時）の反対で阻止され葬り去られた。やはり馬鹿につける薬はないらしい。

2021年9月天安門にブラックスワンが飛来したという。天安門を徘徊する成仏しない怨霊の仕業か、はたまた反習連合が上げた狼煙なのか誰も知らない。

〈参考文献〉

石平：中国共産党 暗黒の百年史. 飛鳥新社, 東京, 2021.